

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第96集

中 峯 遺 跡

平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第96集

中 峯 遺 跡

平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

中峯遺跡は、東駿河湾環状道路建設工事に伴う事前調査として実施したものである。東駿河湾環状道路は、数多くの遺跡が存在する愛鷹山、箱根山山麓を通過する路線で計画された。当研究所では平成3年度から、東駿河湾環状道路建設工事に伴い、多くの遺跡を調査してきている。また現在も数か所の発掘調査を同時進行で行っており、その一連の発掘調査の一つが本遺跡の調査である。

遺跡は、箱根山西麓の尾根の一つに位置しているが、調査区はかなりの部分が南側に面した急斜面にある。すぐ北側には、調査をこれから実施する生次沢遺跡^{せいじざわ}があり、この遺跡との関連が推察される。また、一つ東側の尾根には平成8・9年度調査の松林A遺跡、北西側には押出シ遺跡がある。これらはいずれも縄文時代を中心とした遺跡であるので、この辺り一帯は縄文時代人の生活圏の一つとなっていたと思われ、本遺跡の性格を考えるうえでも、他の周辺遺跡の調査結果が待たれるところである。

調査ならび本書作成にあたっては、建設省中部地方建設局沼津工事事務所・静岡県教育委員会・三島市教育委員会をはじめとする関係各位に多大なる援助・協力を受けた。厚くお礼を申し上げる。また、立っているだけでも大変な斜面で発掘作業を行なった当研究所職員と作業員の労をねぎらいたい。

1998年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所 長 齋 藤 忠

例 言

- 1 本書は、三島市竹倉2271-21に所在する中峯遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成8年度に行なった確認調査（第1次、第2次調査）の結果を受け、平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部地方建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成9年4月1日から6月16日まで現地調査を行なった。引き続き、三島整理事務所で整理作業を行い、報告書を刊行して事業を終了した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。
平成8年度（確認調査）
所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 石垣英夫
調査研究四課長 橋本敬之
調査研究員 小川正夫、山中朝二、鈴木 譲
平成9年度
所長 斎藤 忠、副所長 池谷和三、常務理事 三村田昌昭、調査研究部長 石垣英夫
調査研究四課長 橋本敬之
調査研究員 川上 努、菊池吉修
- 4 本書は、川上 努が執筆した。
- 5 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
- 6 発掘調査資料は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

目 次

序	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	3
第3節 調査の経過	4
第Ⅱ章 位置と環境	5
第Ⅲ章 基本層序	7
第Ⅳ章 遺構と遺物	12
第1節 遺構	12
第2節 遺物	16
第Ⅴ章 まとめ	21

挿図・挿表目次

第1図	東駿河湾環状道路と路線上及び周辺の遺跡	1
第2図	中峯遺跡グリッド設定図	3
第3図	遺跡位置図及び周辺遺跡位置図	6
第4図	基本土層柱状模式図	7
第5図	第1・2・3・4トレンチ土層断面図	10・11
第6図	中峯遺跡遺構全体図	13
第7図	土坑SF-1～5実測図	14
第8図	SD-1土層断面図	15
第9図	遺物出土分布図	17
第10図	出土遺物実測図(1)・(2)	18・19
第1表	東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地一覧表	2
第2表	周辺遺跡地名表	6
第3表	石器計測表	20

図版目次

図版1	1 遺跡遠景(三島市確認調査No.23地点から)
	2 遺構全景(南から)
図版2	1 SF-2半裁状況(東から)
	2 SF-4半裁状況(東から)
	3 SF-3半裁状況(東から)
	4 SF-3完掘状況(南から)
	5 SF-1、SF-2遠景(西から)
	6 SF-1、SF-2遠景(南東から)
	7 T、P1北壁土層断面
	8 T、P2北壁土層断面
図版3	出土遺物(黒耀石、石皿)

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経過

伊豆地域を訪れる観光客の多くが自動車を利用することから国道136号を中心とした静岡県東部の各道路は、慢性的な渋滞を引き起こしている。この渋滞を解消する交通施策の一環として、当地域に環状的に迂回し、通過交通の排除、地域内外交通の整理、環状道路周辺地域の開発を図ると同時に、地震発生時等非常時における緊急輸送等の役割をも期待する東駿河湾環状道路が建設されることになった。沼津市から長泉町、三島市をとおり函南町の熱函道路に到達し、国道136号線バイパスの伊豆中央道に合流する総延長15.0kmの東駿河湾環状道路は、高規格幹線道路「伊豆縦貫自動車道」である。この路線には全部で42の遺跡が想定されており、本研究において平成3年度から確認調査が開始され、遺構・遺物が確認された場所について本調査が行われてきた。その詳細は第1表にまとめた。なお、遺跡につけられた番号は建設省がつけた通し番号と、各市町村でつけた整理番号があり、第1図中の番号は、建設省がつけた通し番号である。

中峯遺跡はこの東駿河湾環状道路建設工事に伴う一連の発掘調査のひとつとして、本研究において平成8年度に確認調査を行なった。すぐ北側の三島市№19地点（生茨沢遺跡）では旧石器時代から縄文時代にいたる良好な土層堆積状況が確認されたことから同様に期待が持たれた。調査地内にテストピットを10か所、中央部にトレンチ1本を設定して確認調査を行った。その結果、縄文時代の遺物として黒耀石の剥片と石皿が出土し、中世の土坑が検出された。これを受けて、本調査に入ることとなり、調査対象面積を約1400㎡とし、平成9年4月より現地発掘調査を実施するに至った。



第1図 東駿河湾環状道路と路線上及び周辺の遺跡

番号	所在地	各市町村 整理番号	遺跡名	調査状況
1	沼津市	4	上松沢平	調査予定
2	沼津市	3	虎杖原1号墳	調査予定
3	沼津市	2		調査予定
4	沼津市	1	丸尾北	調査予定
5	長泉町	14	柏窪B	調査予定
6	長泉町	54	桜畑上	調査予定
7	長泉町	53	山岸A	H9確認調査
8	長泉町	42	木戸	H9確認調査
9	長泉町	37	池田B	調査予定
10	長泉町	38	鉄平	調査予定
11	長泉町	48	大平	H8本調査
12	三島市	0		調査予定
13	三島市	1	萩B	調査予定
14	三島市	2	北ノ入A	H7確認調査、以後本調査予定
16	三島市	4	長平衛平	H9本調査
17	三島市	5	小池	H9本調査
18	三島市	6		
19	三島市	7	徳倉B	H8本調査
20	三島市	8	上ノ池	H7・8本調査
21	三島市	9	遺跡なし	H5確認調査
22	三島市	10	八田原	H7本調査『八田原遺跡』1997
23	三島市	11	加茂ノ洞B	H6本調査『加茂ノ洞B遺跡』1996
24	三島市	12	遺跡なし	H5確認調査
25	三島市	13		市道につき調査対象外
26	三島市	14	五百司	H5確認調査『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』1996
27	三島市	15	焼場	H4・7本調査『焼場遺跡A地点』1994 『焼場遺跡B地点・五百司遺跡』1996
28	三島市	16・17	下原	H5本調査『下原遺跡Ⅰ』1995、『下原遺跡Ⅱ』1996
30	三島市	18	押出シ	H8・9本調査
31	三島市	19	生茨沢	H8確認調査
32	三島市	20	中峯	H9本調査『中峯遺跡』1998
33	三島市	21	松林A	H8・9本調査
34	三島市	22		調査予定
35	三島市	23		H9確認調査
36	三島市	24	又タウチ八山	H9確認調査
37	三島市	25		H9確認調査
38	三島市	26	田頭山	調査予定
39	三島市	27	大明神洞	調査予定
40	三島市	28	長命洞B	調査予定
41	三島市	29	大場向山B	調査予定
42	三島市	30		調査予定

第1表 東駿河湾環状道路関係埋蔵文化財包蔵地一覧表

第2節 調査の方法

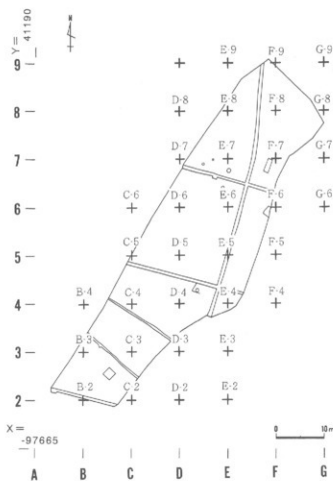
調査区は杉や檜、くぬぎなどの山林であったため、これらを伐採するところから作業が始まった。伐採後、重機を使って表土除去を行ない、合わせて、重機ではかなり大きく掘らなければならないようなものを人力で抜根した。それ以降は、遺構検出面までの掘削、遺構・遺物検出については手堀りで行なった。

調査区内に10m方眼のグリッドを設定した。グリッド基軸線は、国土方眼を用い、 $X = -97665.00$ 、 $Y = +41190.00$ をA-1列とし、南西隅を起点に西から東にA・B・C・・・のアルファベット、南から北へ1・2・3・・・の数字を付した。これにより、グリッド杭の北東の面をA-1のように表記した。

調査区にトレンチを4つ、テストピットを2つ設定した。また、確認調査時に試掘したテストピットは、T、P3とT、P4、T、P5としてそのまま利用した。

また、便宜上第2トレンチより北側を1区、第2トレンチから第3トレンチまでを2区、第3トレンチから第4トレンチまでを3区とした。

遺構は当研究所の整理記号にしたがって、土坑はSF、溝はSDとし、調査区北側より通し番号をつけて表記した。



第2図 中峯遺跡グリッド設定図

出土遺物は黒曜石が素材の石器がほとんどであり、確認調査の時に一点石皿が出土しているが、現地にて洗浄、注記を行ない、台帳に登録し、以後室内にて実測などの整理作業を行なった。遺構平面図の作成に当たっては、現地に水糸を張った簡易遣り方を使用し、縮尺はすべて1:20で作成した。土層断面図については1:50で統一した。

写真撮影は6×7判(白黒)、35mm(カラースライド・白黒・カラーネガ)の組み合わせで記録を取り、調査区全景写真は、高所作業車、ローリング・タワーを使用して撮影した。



第1トレンチ掘削作業風景

第3節 調査の経過

現地調査に先立ち、調査区の杉や檜、くぬぎなどを伐採し、その後重機を使用して表土除去を行なった。また、木の根は重機および人力で取りのぞいた。

以上の作業が終了した4月の第3週から、トレンチを調査区中央部の南北方向にひとつ（第1トレンチ）と斜面の角度が変わる場所3か所の東西方向（調査区北側から第2・3・4トレンチ）にそれぞれ設定し掘削を行なった。土層確認のためにピットを2区の東側、第2トレンチ南側に1か所（T.P-1）、第2トレンチの一部を深掘り（T.P-2）した。

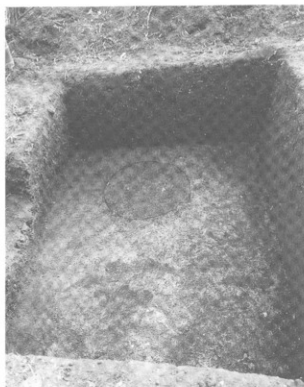
5月より1区から表面精査を行なったところ、調査区北東で集石土坑と小動物の骨が検出されたが、これは後に現代のものと判明した。1区のグリッドD-6、第2トレンチの北側で円形土坑（SF-1、2、3）が検出され、中世のものと判断されたが遺物は伴わなかった。

2区に入り、調査区北西で集石土坑が検出されたが、これも現代のものであった。2区のグリッドE-5から遺物が出土、いずれも黒曜石であった。また2区のグリッドE-4から黒曜石の遺物が出土した。さらに、2区のグリッドD-6、第2トレンチ南側で、中世と思われる円形土坑（SF-4）が検出されたが遺物はなかった。

3区では、東西方向に溝状の遺構が2つ検出された（SD-1、2）が、現代のものであると判断し、また、さらに南側、第4トレンチの北側に方形土坑が2つ（SF-5、6）、円形土坑が1つ（SF-7）検出されたが、表土と同じ埋土であるため、現代のものと判断した。

平行して3区南側の最も低いところに堆積している黒褐色土の掘り下げを行ない、かなり新しいものと思われる磁器片が数点出土したが、それ以外はとくになかった。

現地での作業は5月いっぱいまで終了し、6月の第2週までに現地を撤収した。



SF-5 検出状況



高所作業車による写真撮影

第Ⅱ章 位置と環境

中峯遺跡は三島市街地の南東部、田方平野を望む箱根山麓末端部の丘陵上に位置する。本遺跡のある三島市は、静岡県東部の、伊豆半島の付け根に位置しその地形は大きく3つの部分に分かれる。

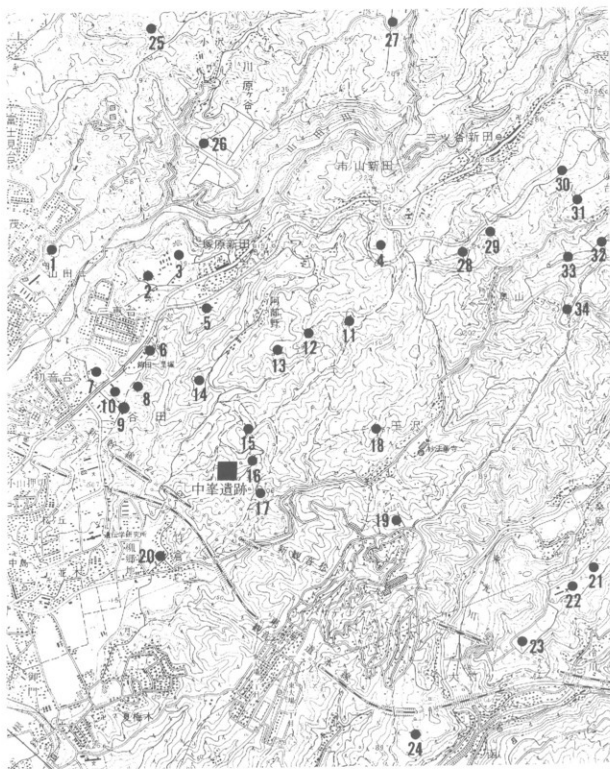
第1は市の東半分にあたる箱根外輪山西麓である。箱根山は今から約40万年前に活動を開始し、当初は富士山型をなしそれを凌駕する成層火山であったが、数度にわたるカルデラの形成と噴火活動の繰り返しによって、現在に見る複雑な火山体となったことが知られている。三島市のその西斜面は、今から約5万年前、箱根火山第3期の活動とされる盾状火山の形成に伴って多量の軽石が流下し、層厚40mにも及ぶ火砕流堆積物層が形成されてきたものである。標高400m位から緩斜面の地形を呈し、境川、沢地川、山田川、米光川の4本の河川によって規定される3地域の丘陵に分かれる。それぞれの丘陵は枝状に入り込んだ支流や侵蝕谷によって開折され、分岐した小さな尾根をいくつも作り出している。この地域は遺跡が営まれる良好な環境を備えているため、旧石器時代から縄文時代の遺跡が数多く確認されている。また、畑作地として古くから開墾されてきた歴史を持つ。

第2は三島市街地及びその北側の裾谷谷の、富士山を起源とする今から1万4千年ほど前に流下した三島溶岩流と呼称される溶岩大地である。

第3は、市街地の南域の、第1地形の丘陵の前面に展開する広大な沖積平野である。「三島・沼津平野」とよばれ、さらに広範囲な地域を含めて「田方盆地」あるいは「田方平野」とも呼ばれる。紀元前8千年前、縄文期における地球規模の温暖化現象により海水準が上昇、このため出現した「古狩野湾」と呼ばれる浅海性内湾が、狩野川、黄瀬川、大場川の河川によって沖積され形成されたものである。

今回調査を行なった中峯遺跡は、第1の箱根山西麓地域に位置している。山田川と夏梅木川によって規定された丘陵の尾根のひとつにあり、見晴らしと日当たりが非常によく、古代の人々の活動場所として適した場所であると考えられる。『静岡県文化財地図Ⅰ』、『静岡県文化財地名表Ⅰ』にも中峯遺跡の名はあり、縄文時代前期の散布地となっていて、縄文土器が畑で表採されていたようである。現在ではそのような状況はなくなっていて、調査中に土器が検出したり周辺で拾ったりすることはなかった。調査で実際に検出できたのは、旧石器時代末期から縄文時代草創期の石器と中世の遺構である。

また、周辺にもかなりの数の遺跡が存在する。本遺跡の周辺に位置する遺跡にも、縄文時代の遺跡を中心に旧石器時代、弥生時代、古墳時代等の遺跡がある。次ページに、中峯遺跡で検出した遺物に関連する周辺の旧石器・縄文時代及び中世の遺跡をあげた。そのなかで、とくに中峯遺跡との関連が深いと考えられる遺跡は、周辺遺跡表の15の生茨沢遺跡、16の検林B遺跡、17の検林A遺跡、20の竹倉遺跡である。『静岡県文化財地名表Ⅰ』では、生茨沢遺跡は縄文時代中期の土器の散布地となっており、位置的にあって、この遺跡の土が遺物とともに中峯遺跡へ流れ込んだ可能性が高い。また、中峯遺跡は、この生茨沢遺跡とセットにして考えたほうが分かりやすいと思われるような立場にある。16の検林B遺跡は、縄文時代前・中期の土器散布地、17の検林A遺跡は現在調査中であるが、縄文時代早～中期、弥生時代の土器散布地である。検林A遺跡では、縄文土器や石器が実際に検出されており、また中峯遺跡と同様の中世の土坑が検出されていて、その位置もひとつ尾根を隔てただけであり関連性がかなりあると想定される。20の竹倉遺跡は中世の遺跡で、青磁、陶器の散布地であるが、現在の竹倉の集落のもとになる遺跡で、中世には人々が住んでいた証拠になり、中峯遺跡や検林A遺跡の土坑はこの竹倉遺跡の住人との関連があると考えられる。



第3図 遺跡位置図及び周辺遺跡位置図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	十石洞遺跡	旧石器, 縄文(前・中)	13	カシワガシD遺跡	縄文(早)	25	鎌ヶ沢B遺跡	旧石器, 縄文(早・前)
2	下原遺跡	旧石器, 縄文(早・中)	14	押出シ遺跡	縄文(中)	26	山田山A遺跡	旧石器, 縄文(早・中)
3	北原遺跡	旧石器, 縄文(早・前)	15	半栗沢遺跡	縄文(中)	27	山田山A遺跡	旧石器, 縄文(早)
4	カシワガシA遺跡	旧石器, 縄文(前・中)	16	松林B遺跡	縄文(前・中)	28	台崎J遺跡	縄文(中)
5	塚原初音原遺跡	旧石器	17	松林A遺跡	縄文(早～中), 弥生	29	塚原後下遺跡	旧石器, 縄文(早・中)
6	船久保遺跡	旧石器, 縄文(早)	18	天台遺跡	縄文(早～後)	30	笠原後B(大面)遺跡	旧石器, 縄文(中)
7	松音ヶ原A遺跡	旧石器, 縄文(早)	19	南山遺跡	旧石器, 縄文(中)	31	台崎E遺跡	旧石器, 縄文(中)
8	桂岡山遺跡	旧石器, 縄文(早)	20	竹倉遺跡	中世	32	台崎G遺跡	旧石器, 縄文(中)
9	小松保遺跡	旧石器, 縄文(前)	21	上原遺跡	旧石器, 縄文(早)	33	台崎H遺跡	旧石器, 縄文(早)
10	松音ヶ原B遺跡	旧石器, 縄文(早)	22	中原遺跡	旧石器, 縄文(早)	34	台崎I遺跡	旧石器, 縄文(早)
11	カシワガシB遺跡	縄文(早)	23	大竹上原遺跡	旧石器, 縄文(前)			
12	カシワガシC遺跡	縄文(早)	24	下人原遺跡	旧石器, 縄文(早～中)			

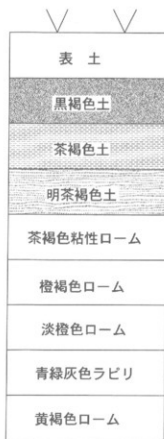
第2表 周辺遺跡地名表

第Ⅲ章 基本層序

箱根山西麓に堆積するローム層は、「箱根西麓ローム層」と呼ばれ、上から上部・中部・下部ローム層に分けられている。これらのロームは、各連続堆積時期の間かなりの時間的間隔があるため、古い時期のロームが台地上に堆積した後に、次の時期のロームが堆積するまでの間に台地が削られて谷が形成されたり、侵蝕が進んだりする。ゆえに谷壁部では古いロームは侵食されて欠除し、新しいロームが谷壁部に垂れ下がるように堆積している。局部的に厚くなったり、薄くなったり欠除したりする傾向がある。もともと中峯遺跡は斜面地に位置するため、その傾向が顕著で場所によって土層の堆積が異なりかなり乱れていて、全体に均一な土層堆積ではない。また、No.19地点の生茨沢遺跡から流れ込んでいるものと思われ、再堆積した土の残存状況もあまりよくない。第4図の土層柱状図は、模式的にそれぞれで確認できた土層をもとに堆積順に並べたもので、その上下関係を示しただけで土層の厚みはまったく示していない。また、この柱状図のように、すべての土層堆積がある場所は、今回の調査では確認できていないことを断わっておく。

調査区はもと畑地であり、表土は耕作土である。その下に黒褐色土があり、粘性、しまりともなく、ボソボソした感じで、中世の土であるものと思われる。この層からはSF-5の土坑が検出された。また、その他の土坑の中に入っていたのも、この土である。その下の茶褐色土は礫が混ざっており、遺物が出土した。その下部の明茶褐色土は、上部層に比べて礫はほとんどない。この層からも遺物が出土した。状況から判断してこの層が休場層に相当すると思われるが、休場層とは少し色が異なる。流れ込みによる再堆積や混土の結果と考える。下部より漸移的に茶褐色粘性ローム層に移行していく。このローム層は、粘性が強くしまりもよい。全体的に硬質であり、乾くとガチガチになる。橙褐色ローム層は黄色や橙色、青色のスコリアを含む。粘性が強くしまりがよい。全体的に硬質で、乾くと白っぽくなる。この層は、49000±5000年前の新期箱根軽石流の、上部軽石層の粘土化が進行している部分である。淡橙色ローム層はスコリアをほとんど含まず、粘性が強く、しまりもよい。また、第4トレンチでのみ、淡橙色ローム層の下部に青緑灰色ラピリ層、黄褐色ローム層が確認された。これらは確認調査の時にも見られた土層で、どれも粘性が強くよくなっている。黄褐色ローム層には、黄色・橙色のスコリアが含まれる。

次に各トレンチにおいて確認された土層の状態に



第4図 基本土層柱状模式図

ついて述べておく。

(1) 第1トレンチ西壁

表土

- | | |
|---------------|--|
| 1 橙褐色ローム a | 黄白色のスコリア (5mm大) が混じる。下層よりしまりが悪い。下層が土壌化したものか。 |
| 2 橙褐色ローム b | 1に質的に類似するが、オレンジ、黄白色のスコリア (5mm大) が1に比べて多く混じる。全体的に硬質であり、乾くと白っぽくなる。 |
| 3 淡橙色ローム a | スコリアはあまり含まない。粘性が強い。 |
| 4 茶褐色粘性ローム a | オレンジ・黄白色のスコリア (5mm大)、パミスが混じる。固くしまる。 |
| 5 明茶褐色土 a | オレンジ・黄白色のスコリア (5mm大) が混じる。5cm程度の礫もわずかに含まれる。非常に固く、乾くとガチガチになる。 |
| 6 茶褐色土 a | 7の再堆積か。5~10cmの礫が多く混じる。乾くとガチガチになる。 |
| 7 茶褐色土 b | 6と質的にほぼ同じ。オレンジ・黄白色のスコリア (3mm大) がわずかに混じる。非常に固く、乾くとガチガチになる。 |
| 8 黒褐色土 | バサバサした感じ。5cm大の礫が混じる。中世の土と思われる。 |
| 9 茶褐色土 c | 5~10cmの礫が多く混じる。崩落土か。ガチガチに固い。 |
| 10 明茶褐色土 b | スコリア等は少ない。固くしまる。7に近い。 |
| 11 茶褐色粘性ローム b | 1~10cm大の礫が多く混じる。 |

(2) 第2トレンチ北壁

表土

- | | |
|------------|--|
| 1 橙褐色ローム b | オレンジ・黄・青のスコリアが多量に混じる。5cm大の礫が含まれる。 |
| 2 橙褐色ローム c | 1の崩落土か。5~10cm大の礫が含まれる。スコリアも多少見られる。 |
| 3 明茶褐色土 a | オレンジ・黄白色のスコリア (5mm大) が混じる。礫はあまりない。 |
| 4 茶褐色土 b | 黄白色のスコリア (3mm大) がわずかに混じる。 |
| 5 茶褐色土 c | 3~20cm大の礫が多く混じる。3mm以下のスコリアも少し見られる。非常に固い。 |
| 6 黒褐色土 | バサバサした感じ。5cm大の礫が混じる。中世の土と思われる。 |
| 7 明茶褐色土 c | 3とほぼ同じだが、スコリアが少なくやや柔らかい。礫はまったくない。 |
| 8 明茶褐色土 d | 7とほぼ同じだが、7よりスコリアが多いが3より少ない。 |
| 9 橙褐色ローム d | 2とほぼ同じだが礫がほとんどなく、2よりバサバサしている。 |

(3) 第3トレンチ北壁

表土

- | | |
|------------|-----------------------------------|
| 1 橙褐色ローム b | 赤や青のスコリアが混じる。全体的に硬質であり、乾くと白っぽくなる。 |
|------------|-----------------------------------|

- | | |
|--------------|---|
| 2 橙褐色ローム c | 1 が崩落し再堆積したものと思われる。1 の土が 5 ～10cm 大のブロックで混じる。 |
| 3 茶褐色粘性ローム a | 4 に近いが礫はあまり混じらない。オレンジ・青のスコリア（5mm 大）を少し含む。乾くとガチガチになる。 |
| 4 明茶褐色土 e | 5 ～20cm 大の礫を含み、オレンジ・青のスコリアが多く混じる。1 の土をブロックで含む。かなり古い時代に 1 か 2 が再堆積したものと思われる。 |
| 5 黒褐色土 | バサバサした感じ。中世の土と思われる。 |

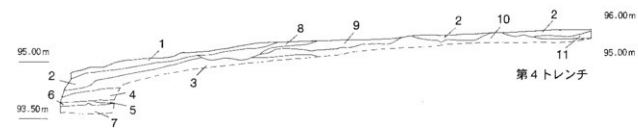
(4) 第 4 トレンチ北壁

表 土

- | | |
|-------------|---------------------------------------|
| 1 表土の残り | |
| 2 橙褐色ローム a | 3 が土壌化したものか。粘性が高い。 |
| 3 橙褐色ローム b | しまり、粘性ともに高い。 |
| 4 淡橙色ローム a | しまり、粘性ともに高くごくわずかだが青灰色のスコリアを含む。 |
| 5 青緑灰色ラピリ | 粘性が強くよくしまっている。 |
| 6 黄褐色ローム a | オレンジ・青灰色のスコリアが混じる。粘性はあるが、粒子はやや荒いか。 |
| 7 黄褐色ローム b | オレンジ・青灰色のスコリアが多く混じる。粘性は強く、しまりがよい。 |
| 8 表土の残り | 木の根による腐食と思われる。 |
| 9 橙褐色ローム a | 2 と同じか。1 が堆積する前の表土だと思われる。 |
| 10 橙褐色ローム b | オレンジ・青灰色のスコリアを含む土のブロック（10cm 大）が多く混じる。 |
| 11 橙褐色ローム e | スコリア等が混ざらないが、10 とほぼ同じと考えられる。 |

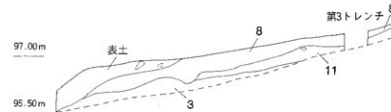


第 3 トレンチ掘削作業風景



第4トレンチ北壁

- 1 表土の残り
- 2 橙褐色ローム a
- 3 橙褐色ローム b
- 4 淡橙色ローム a
- 5 青緑灰色ラビリ
- 6 黄橙色ローム a
- 7 黄橙色ローム b
- 8 表土の残り
- 9 橙褐色ローム a
- 10 橙褐色ローム b
- 11 橙褐色ローム c



第3トレンチ北壁

- 1 橙褐色ローム b
- 2 橙褐色ローム c
- 3 茶褐色粘性ローム a
- 4 明茶褐色土 e
- 5 黒褐色土
- 6 木の根

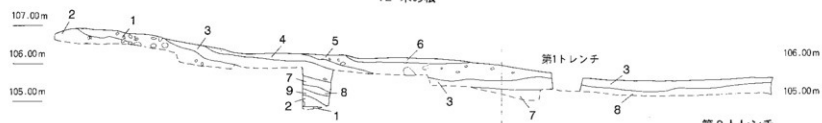
第4トレンチ

第1トレンチ



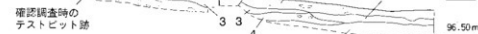
第2トレンチ北壁

- 1 橙褐色ローム b
- 2 橙褐色ローム a
- 3 明茶褐色土 a
- 4 茶褐色土 b
- 5 茶褐色土 c
- 6 黒褐色土
- 7 明茶褐色土 c
- 8 明茶褐色土 d
- 9 橙褐色ローム d

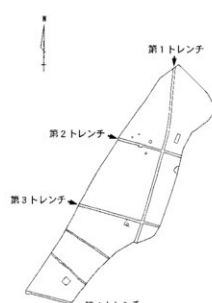


第1トレンチ西壁

- 1 橙褐色ローム a
- 2 橙褐色ローム b
- 3 淡橙色ローム a
- 4 茶褐色粘性ローム a
- 5 明茶褐色土 a
- 6 茶褐色土 a
- 7 茶褐色土 b
- 8 黒褐色土
- 9 茶褐色土 c
- 10 明茶褐色土 b
- 11 茶褐色粘性ローム b
- 12 木の根



第3トレンチ



第5図 第1・2・3・4トレンチ土層断面図



第Ⅳ章 遺構と遺物

第1節 遺構

中峯遺跡で検出された遺構は、中世の土坑（SF）5基、近代以降の溝（SD）2条である。以下、各遺構の概要について述べる。

SF-1

グリッドD-6の明茶褐色土面で検出された円形土坑である。大きさは長径51cm、短径42cmで、最も深い南側が12cmあるが、斜面にそって北側になるほど浅くなる。覆土は暗褐色土が1層だけで、中世の黒褐色土より少し粘性があるが、周辺の茶褐色土に比べれば、全くバサバサした感じである。地山の土が崩れたものと中世土の混土である。中から遺物は何も出土しなかった。

SF-2

グリッドD-6とD-7にまたがった位置の、明茶褐色土面で検出された円形土坑で、SF-1のすぐ西にある。大きさは長径41cm、短径42cm、深さは8cmである。底が比較的均一のため、深さは場所によってあまり変わらない。覆土は暗褐色土が1層で、SF-1と同じものである。遺物は出土しなかった。

SF-3

グリッドD-6とE-6にまたがった位置の、明茶褐色土面で検出された円形土坑である。大きさは長径88cm、短径78cmで最も深い西側が17cmであるが東側の方が少し浅くなっている。検出された土坑のうちで最も大きい。覆土は2層あり、1層目に中世の黒褐色土が全面に入っている。バサバサして粘性は低い。その下に半載した西側部分のみ暗褐色土が入っているが、これはSF-1・2の土と同じである。中に礫がいくつか入っていたが、遺物はなかった。

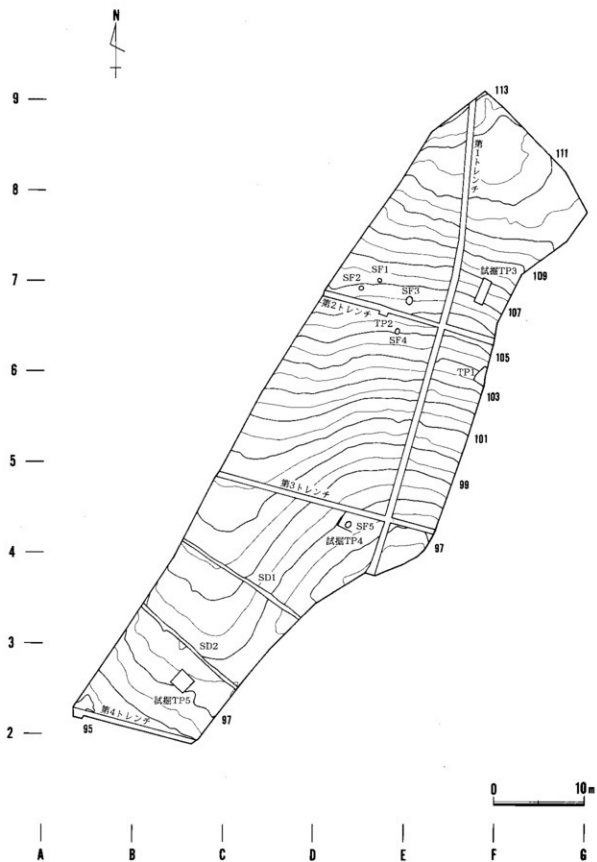
SF-4

グリッドD-6の茶褐色土面で検出された円形土坑である。大きさは長径76cm、短径61cm、最も深い南側が26cmあるが、斜面に沿って北側になるほど浅くなる。しかし、検出された土坑の中で最も深い。覆土は2層あり、1層目に中世の黒褐色土が入っている。SF-3の土と同じであるが、5mm大の礫が混じる。2層目は暗褐色土で他の土坑のものと同じである。遺物はなし。

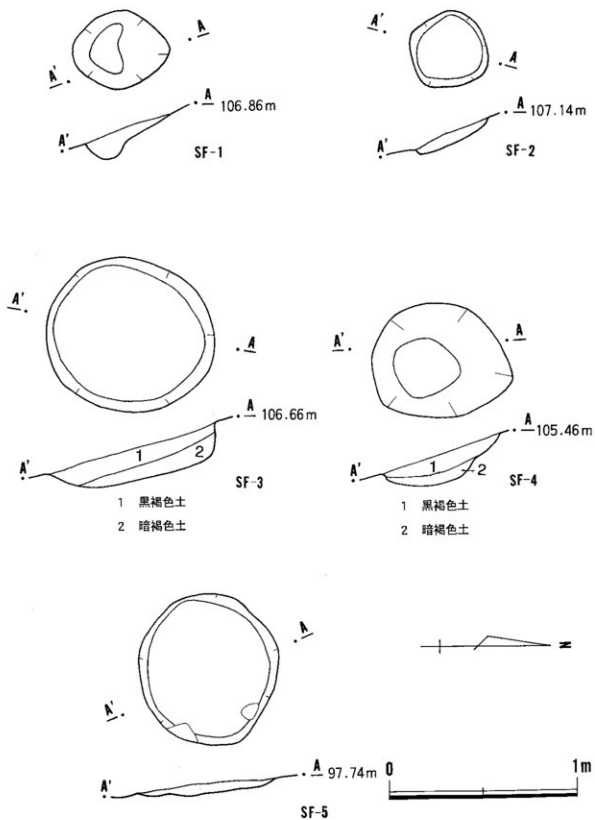
SF-5

グリッドD-4、確認調査でのテスト・ピット4の調査中に、茶褐色粘性ローム層面で検出された円形土坑である。大きさは、長径81cm、短径75cm、深さは5cmである。覆土は黒褐色土が1層で、他の土坑の中世土と同じである。覆土中より黒耀石片が1点出土した。

中世の土坑は以上5基であるが、もうひとつ、木の根の可能性が強く、はっきり確認できなかったため検出しなかったが、グリッドD-4、第3トレンチにかかる位置に、直径60cm程、深さ20cm程の大きさで中世土に近い粘性、しまりともに低い土が落ち込んでいる場所が見られた。



第6図 中峯遺跡遺構全体図



第7图 土坑SF-1~5实测图

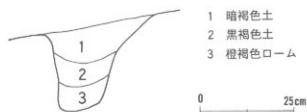
SD-1

調査区3区、グリッドB-4からB-3、C-3に北西-南東方向にほぼ真っ直ぐに掘られている。近代以降に根切り溝として掘られたと思われる。長さ18m、幅は最も広いところで51cm、狭いところで30cm、一番深いところで22cmあるが均一の深さでない。覆土は表土と同じ土が10cm程ある下に、上層よりもう少し黒っぽく粒子もやや荒い感じの土が5cm程、検出面の橙褐色ロームが崩れて再堆積したと思われる土がその下に5cm程堆積している。特に出土品はない。

SD-2

調査区3区、グリッドB-3からB-2、C-2に北西-南東方向にほぼ真っ直ぐに掘られている。SD-1同様近代以降の根切り溝であると思われる。長さ15m、幅は広いところが42cm、狭いところが23cm、深さは深いところで12cm、浅いところで8cmで底は比較的平らできれいに溝が切られている。覆土はSD-1と同様に粒子の粗い黒い土が入り、橙褐色ロームの再堆積土がある。遺物もない。

また、遺構図として図示しなかったが、確認調査のT・P5の南側に戦後に芋棚として掘られた方形土坑が2つと円形土坑が1つ確認されている。



第8図 SD-1土層断面図



SD-1 全景

第2節 遺物

中峯遺跡から出土した遺物は、旧石器時代末期から縄文時代草創期にかけてのものと思われ、すべて石器で41点ある。黒耀石が材料のもの40点、安山岩の石皿が1点で、人力掘削中に出土したS-30、S-31と確認調査での人力掘削中に出土したS-36、S-41を除き、茶褐色土・明茶褐色土層から出土し、ほとんどが標高101.5～102.5mの間で、出土地点はグリッドE-5に集中している。このグリッドE-5の遺物出土集中地域には、他には全く跡がないが、出土地域を中心に2つだけ、6cm角ほどのものと、直径5cmほどのものがある。何らかの関係があるかと思うがはっきりしたことは言えない。

黒耀石でできている石器の肉眼による産地同定は、長野の霧ヶ峰産や和田峠産が多いようで、一部箱根の宿産がある。全体に遺物が小さく、また折れていたたり、一部が欠けていたりするものが多い。そこで、ここでは点数を絞ってみていくことにする。実測図及び写真図版も、点数をしばってあげておく。

(1) 細石刃

細石刃及びそれらしきものは、S-1・2・3・18・29・32の6点である。どれも、上もしくは下あるいは上下ともが折れている。とくにS-2は打面部が明確に確認できる。

(2) 楔形石器

S-5の1点で、上下両端部に線状のつぶれがあるものの、ほぼ完形である。

(3) 石鏃

S-6の1点で、凹基（無茎）式石鏃。頭部と右脚部が欠けている。

(4) 小型石刃状剥片

S-25の1点でやや大きめであるものの細石刃に類似するが、途中で折れているために全体像がはっきりしないので、細石刃とは別とした。

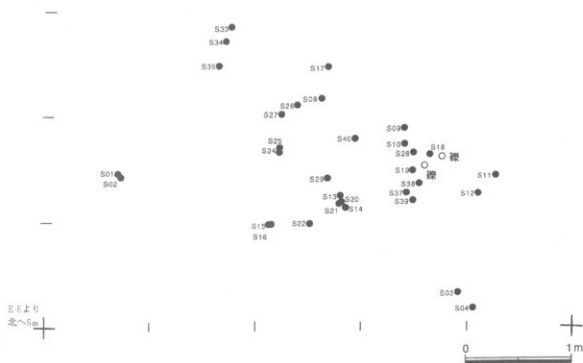
(5) 石皿

S-41の1点で、確認調査の時に人力掘削中に出土したため出土地点がはっきりしないが、グリッドD-7に相当する北西部分の調査区縁の黒褐色土の礫層中であつたものだと思われる。なお、この黒褐色土の礫層とは、戦後調査区を畑にした時、耕作中に出てきた礫を地境に埋めたもので、どこかにあつた石皿がたまたま一緒に埋められて、今回の調査で出土したものと思われる。また、ここにある黒褐色土は、他の黒褐色土とほぼ同じであり、ここに少したまっていてという感じである。

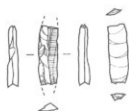
上記以外では図示していないが、使用痕がある剥片が3点（表中S-7・12・13）、確認調査時出土の二次加工剥片あるいは未製品かと思われるものが1点（表中S-36）といったところであり、残りは小さな剥片か砕片である。また、グリッドD-3～4の黒褐色土から近代以降の陶磁器片7点（うち1点は幕末のもの）が確認されている。



出土地点の中心にあった礫
(下図の○印)



第9図 遺物出土分布図



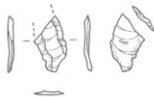
S-1 (写真図版3-6)



S-2 (写真図版3-3)



S-3 (写真図版3-4)



S-3.2 (写真図版3-1)

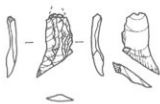


S-1.8 (写真図版3-2)

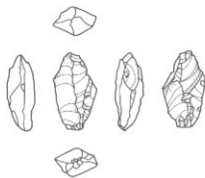


S-2.9 (写真図版3-5)





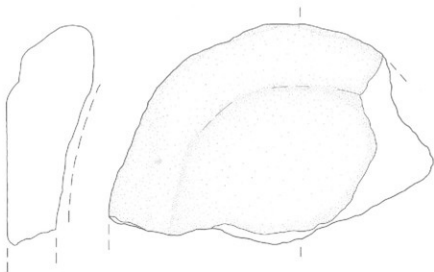
S-25 (写真図版3-7)



S-5 (写真図版3-8)



S-6 (写真図版3-9)



S-41 (写真図版3-10)



第10図 出土遺物実測図(2)

登録番号	器種	石材	縦長 (mm)	横長 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	X	Y	H
S-01	剥片	黒曜石	(15.7)	4.8	2.5	(0.18)	46.443	40.695	102.007
S-02	剥片	黒曜石	(18.3)	5.9	1.6	(0.23)	46.428	40.708	102.001
S-03	剥片	黒曜石	(14.8)	6.3	3.1	(0.22)	45.318	43.913	101.580
S-04	剥片	黒曜石	(14.2)	31.6	13.1	(4.54)	45.173	44.060	101.508
S-05	楔形石器	黒曜石	20.1	11.5	9.0	1.28	43.939	42.183	100.894
S-06	石皿	黒曜石	(22.0)	(12.8)	4.0	(0.70)	34.777	40.408	97.733
S-07	使用痕剥片	黒曜石	26.5	28.1	4.4	5.88	37.001	42.109	98.461
S-08	剥片	黒曜石	12.3	7.9	1.9	0.19	47.163	42.605	102.320
S-09	剥片	黒曜石	11.2	6.1	2.8	0.10	46.880	43.398	102.195
S-10	剥片	黒曜石	(5.1)	(9.2)	0.8	(0.07)	46.728	43.398	102.136
S-11	剥片	黒曜石	(9.8)	3.3	1.3	(0.04)	46.429	44.262	102.037
S-12	使用痕剥片	黒曜石	12.2	10.7	2.0	0.32	46.259	44.101	101.954
S-13	使用痕剥片	黒曜石	(5.5)	(8.4)	2.9	(0.13)	46.236	42.797	101.883
S-14	剥片	黒曜石	6.3	6.4	1.0	0.04	46.126	42.852	101.841
S-15	剥片	黒曜石	(7.3)	4.0	1.9	0.08	45.964	42.123	101.739
S-16	砕片	黒曜石	(5.2)	3.2	0.7	(0.03)	45.964	42.130	101.743
S-17	剥片	黒曜石	14.1	18.6	5.3	1.35	47.455	42.672	102.326
S-18	剥片	黒曜石	(7.6)	9.0	1.2	(0.06)	46.634	43.647	102.061
S-19	砕片	黒曜石	(3.1)	(5.7)	(2.8)	(0.04)	46.483	43.482	102.011
S-20	剥片	黒曜石	9.0	20.6	7.6	1.14	46.157	42.808	101.830
S-21	砕片	黒曜石	2.4	4.6	0.9	0.02	46.168	42.815	101.830
S-22	砕片	黒曜石	(2.6)	4.8	0.5	(0.02)	45.987	42.509	101.743
S-23	剥片	黒曜石	6.5	10.7	9.5	0.59	34.692	40.641	97.595
S-24	砕片	黒曜石	3.4	1.5	0.9	0.01	46.681	42.216	102.026
S-25	剥片	黒曜石	(16.8)	10.0	2.2	(0.24)	46.699	42.220	102.019
S-26	砕片	黒曜石	(2.5)	6.5	0.6	(0.01)	47.103	42.385	102.205
S-27	剥片	黒曜石	(5.1)	5.2	2.6	(0.06)	47.019	42.230	102.146
S-28	砕片	黒曜石	(4.2)	(4.0)	1.0	(0.02)	46.642	43.484	102.070
S-29	剥片	黒曜石	(7.7)	8.5	2.6	(0.15)	46.406	42.674	101.949
S-30	剥片	黒曜石	9.7	4.9	0.9	0.05			
S-31	剥片	黒曜石	8.4	3.2	0.5	0.02			
S-32	剥片	黒曜石	(15.3)	7.8	2.0	(0.09)	39.257	38.434	98.948
S-33	剥片	黒曜石	16.5	22.3	3.9	1.00	47.833	41.751	102.281
S-34	砕片	黒曜石	2.4	4.2	0.9	0.01	47.708	41.699	102.239
S-35	砕片	黒曜石	3.3	4.9	1.0	0.01	47.480	41.630	102.134
S-36	二次加工剥片	黒曜石	(13.1)	(14.6)	7.5	(1.21)			
S-37	砕片	黒曜石	2.2	6.0	0.6	0.01	46.267	43.426	101.917
S-38	砕片	黒曜石	(3.6)	(6.9)	1.0	(0.03)	46.352	43.538	101.954
S-39	砕片	黒曜石	(3.2)	5.8	0.5	(0.01)	46.187	43.479	101.883
S-40	剥片	黒曜石	(5.1)	7.6	1.8	(0.07)	46.786	42.928	102.115
S-41	石皿	安山岩質溶岩	(261.5)	(176.0)	76.5	(3500)			

第3表 石器計測表

第V章 ま と め

今回の発掘調査では、旧石器時代末期から縄文時代草創期にかけてと思われる遺物と、中世と思われる土坑が確認できた。遺跡の場所が台地状尾根の先端部で斜面地のために、土層の残存状態も悪く、遺跡の性格をはっきり断言するに足るだけの要素が不十分である。しかし、逆に言えば、土層状態は今まであまり見られなかったものを検出したので、その意味では今後の課題となり得る。

中峯遺跡は生茨沢遺跡との関連がかなり深いと考えられるため、土の流れ込みとともに遺物ももたらされた可能性があり、生茨沢遺跡の調査が行われることで中峯遺跡の遺物についても少し深く考察できると考える。

検林A遺跡もまた中峯遺跡との関連があり、調査結果の報告が待たれる。この遺跡も中峯遺跡を考える上で重要な材料である。

さらに中世の土坑としての遺構は、山の下にある竹倉遺跡の存在とのかかわりを考えている。現在の竹倉の集落がひとつの村となったのは近世に入ってからであるが、中世の谷田村内の一部として確立したのが竹倉遺跡であろう。

このような点から、今回の調査で派手な成果はなかったが、生茨沢遺跡や検林A遺跡、さらに竹倉遺跡を考える材料のひとつを提供できたと思う。したがって、中峯遺跡に対してのさらに深い考察は今後の課題ではあるが、とくに生茨沢遺跡の調査が行われることで、より明確な意味づけができるわけであり、生茨沢遺跡の調査結果が待たれる。

参考文献

- 静岡県 『静岡県史 資料編1 考古一』1990
- 静岡県 『静岡県史 資料編3 考古三』1992
- 三島市誌増補版編さん委員会 『三島市誌 増補』1987 三島市
- 三島市誌増補版編さん委員会 『三島市誌 増補 資料編Ⅱ』1992 三島市
- 静岡県教育委員会文化課 『静岡県文化財地図Ⅰ』1988 静岡県教育委員会
- 静岡県教育委員会文化課 『静岡県文化財地名表Ⅰ』1988 静岡県教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 『下原遺跡Ⅰ』1995
- 加藤晋平/鶴丸俊明 『図録 石器の基礎知識Ⅰ』1980 柏書房
- 加藤晋平/鶴丸俊明 『図録 石器の基礎知識Ⅱ』1980 柏書房
- 鈴木道之助 『図録 石器の基礎知識Ⅲ』1981 柏書房
- 箱根山西麓調査委員会 『箱根山西麓調査報告書』1976

〈発掘作業参加者〉

金井 徹 菊池 茂 桑山隆充 高梨吉勝 高山亀治 武田 繁
天野由紀子 稲葉澄枝 勝又幸子 吉満みさ江

〈整理作業参加者〉

勝又幸子 鈴木輝美 高遠美幸 高田みゆき

〈遺物写真撮影〉

湊 嘉秀 (特殊技術員)

〈石材鑑定〉

森嶋富士夫 (技術作業員)

圖 版



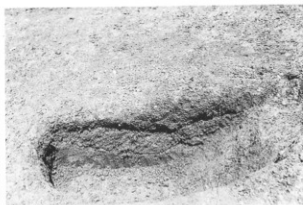
1 中峯遺跡遠景



2 中峯遺跡全景



1 SF-2 半截状況 (東から)



2 SF-4 半截状況 (東から)



3 SF-3 半截状況 (東から)



4 SF-3 完掘状況 (南から)



5 SF-1、SF-2 遠景 (西から)



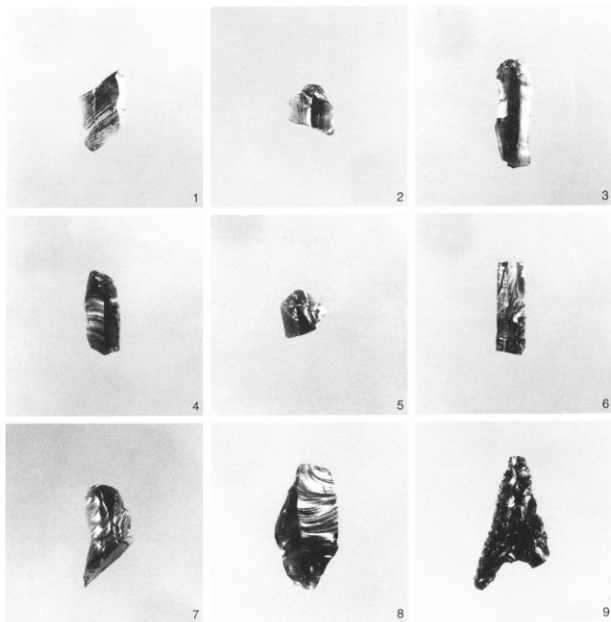
6 SF-1、SF-2 遠景 (南東から)



7 T.P1北壁土層断面



8 T.P2北壁土層断面



中峯遺跡出土遺物

- 1 細石刃
- 2 細石刃
- 3 細石刃
- 4 細石刃カ
- 5 細石刃カ
- 6 細石刃カ
- 7 小型石刃状剥片
- 8 楔形石器
- 9 石鏃
- 10 石皿



報 告 書 抄 録

ふりがな	なかみねいせき						
書名	中峯遺跡						
副書名	平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第96集						
編著者名	川上 努						
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261						
発行年月日	1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯/東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
なかみね 中峯	しずおかけんいせき 静岡県三島市 たけくら 竹倉	22206	324	35° 2' 8" / 138° 57' 03"	1997年4月 ↓ 1997年6月	1446	東駿河湾環状道路 建設工事に伴う埋蔵 文化財発掘調査業務
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物			特記事項
中 峯	散布地	旧石器時代 ↓ 縄文時代 中世	石器集中地点 土坑	細石刃・石鏃・小型石刃状剥片・楔形石器 剥片・碎片・石皿 な し			

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第96集

中峯遺跡

平成9年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261
FAX 054-262-4266

印刷 株式会社 三創
静岡市中村町166番地の1
TEL (054) 282-4031